瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 14
瑪瑙集 …… 26
紅玉集 …… 28
俳誌交歓 …… 29
12月号月評 …… 30
恵贈句集拝見（41） …… 32
恵贈俳誌拝見（12） …… 34
特別作品「伝書鳩」 …… 36
琥珀集作品鑑賞 …… 38
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 39
Ⅱ …… 40
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 41
ひこばえ通信（13） …… 43
イタリア俳句・紀行文（4） …… 44
姫の国父の蒼天（32） …… 46
飛鳥稲渕棚田の彼岸花・石舞台吟行 … 48
なにわ〝上町台地のこと〟 …… 50

2011/12　第69号

今月の一句

韋駄天の前急ぐべし冬の旅

桂樟蹊子

（昭和四十八年作）

永平寺へ詣でられた時の作品である。韋駄天は、子を攫って逃げようとする鬼を追いかけて子を取り戻したという足の速さ、その前に立つと誰でもの視線が自ずから足に集まるものである。雪深い北陸の旅の寒さは格別で、韋駄天走りを思いながら、なんとなく急ぎ足でその場を去られた師の姿が浮かぶようである。

隆子

PDF= 俳誌の salon

烏瓜

塩路隆子

橡の餅峡の谺を匿へる

鵙日和つけもの樽のよく乾き

李太白ここちの酔歩芒原

顔大きい案山子に雀近寄らず

風情なき人の名づけし死人花

蔓引けば山家もろとも烏瓜

秋しぐれ猿の母性の授乳時

PDF= 俳誌の salon

十二月号光耀抄

塩路　隆子選

情念のごとく噴きあげ曼珠沙華　田中　浅子
宿の下駄つっかけ秋の道後かな　山口キミコ
こざっぱり生きてもんぺや草の花　松岡　和子
回想に耽る浅酌菊膾　阪本　哲弘
ひょんの実の軽さ悲しと思へる日　伊藤　純子
秋風にラフな着こなしニューモード　北尾　章郎
どの鹿も尻毛は同じ量の白　吉田　希望
曼珠沙華むかしを語る異人墓地　落合　晃
龍田姫機嫌よき日の湖の凪　竹内　悦子
御徒士町見越しの柿の似合ふ道　川崎　利子
旅情碑の千曲川べり初紅葉　鈴木　照子
古代米刈り進む田や斎宮址　田下　宮子
花芒風に靡くが似合ひけり　坂上　香菜
間引菜に優劣はなし運不運　塩路　五郎
手を抜けぬ将棋対戦木の実音　森下　康子
藩校の堂に色なき風を聴く　片岡久美子
夏草におぼれてをりぬ道祖神　岡　佳代子

PDF= 俳誌の salon

今年米磨げる感触たのしめる　前川ユキ子
湖へ向く地蔵百体曼珠沙華　長濱　順子
讃美歌の唱和の葬や秋の風　西垣　順子
黒犬の身を震はせて露はらふ　和田森早苗
紋付は箪笥上段菊日和　伊東　和子
京に来て路地のしづけさ新豆腐　杉本　綾
買ひ置きしままの新刊夜長星　池田加寿子
清楚なる白萩たわわ冠木門　中川すみ子
さはやかや湖岸離るる汽船音　増田　一代
安曇川を二分の中州花芒　坂根　宏子
湯上りに秋の初風きいてをり　清水侑久子
ベーカリーの外席人気秋風裡　小澤　菜美
街灯に伸びる吾が影虫しぐれ　宮田　香
山寺に浪曲ひびく秋収め　石川かおり
露草の瑠璃色こぼす棚田みち　田中　芳夫
夜学子に明治を語る教授かな　山本　丈夫
勅使門に嵯峨菊見事夕日照り　松田とよ子
紅玉の大きさほどの暮しかな　笠井　清佑
秋深む古刹巡りの歴女たち　笹井　康夫
磐梯の裾野の広し稲を刈る　井口　淳子

PDF= 俳誌の salon

街道のなごり地蔵や萩の叢　粟倉　昌子
お月さま聞いて下さい愚痴少し　藤見佳楠子
鶉鳴く里穏和なり神の域　宮崎左智子
ふるさとの阿波なつかしや女郎花　紀川　和子
卒寿なほ稲刈り終へし母在はす　山崎　里美
吾がセンサーあはてて秋の更衣　山崎　真義
熱き茶を旨しと思ふ寒露かな　飯田美千子
本因坊の墓前に碁石秋彼岸　五十嵐　勉
秋の野につぎ当てズボン老学者　伊藤　和子
カナダ機の全視野メープル紅葉かな　宇治　重郎
瓦斯燈に明治を灯す浜の秋　大越　義雄
秋桜揺れて風知る異人墓地　大島みよし
お洒落着を選ぶや後の更衣　大堀　賢二
さはやかに紙切る嬰の手自在なる　大松　一枝
ネーム入りの塗箸賜ひ敬老日　和田　郁子
不死鳥の羽搏てるさまに案山子かな　山本　節子
秋天や美容院より妻帰る　山本　孝夫
秋の丘「紅燃ゆる」碑の寂びし　横田　矩子
夕陽照る芒が原や黄金色　松田　和子
子守唄にコラボレーションちちろかな　松田　洋子

PDF= 俳誌の salon

エンデイングノート開きて秋愁ふ　三川美代子
荒るる手を撫でつつ秋の母想ふ　村田　望
穏やかな川の流れや秋彼岸　秦　和子
「ごめんね」とみすゞの谺秋の山　藤本　秀機
来し方を振り返らせる虫の声　西田　史郎
天狗茸森の小人を誑かす　中村ふく子
鯉跳ねて樹影くづるる林泉の秋　中本　吉信
蟋蟀をひとりベッドに聞く夜かな　能勢　栄子
閑けさに筆擱く写経秋澄める　高谷　栄一
秋の日のかたむくころや亡夫恋し　辻　香秀
二年坂旨し楽しと食の秋　寺田　光香
ざつくざく拝みて磨げる今年米　土井くみ子
秋詣高僧に逢ふ延暦寺　富田ヒナ江
匠なる組紐に似て曼珠沙華　西郷　慶子
平等院に千年の色こぼれ萩　佐用　圭子
名水に先づ手を清め萩巡る　桂　敦子
神仏の降臨の里秋澄める　木戸　宏子
父母の亡き故郷よりの今年米　小西　和子
菊薫る女性トリオの平和賞　小林　久子

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

鬼の子

田中　浅子

里山にひしひし迫る秋の声
誰も来ぬ部屋に香焚き良夜かな
鬼の子の風吹くままに遊びをり
情念のごとく噴きあげ曼珠沙華
野仏の化粧へる紅や秋彼岸
名月を見あげて亡夫に声かける
自販機のコーヒーごとり秋うらら

道後

山口キミコ

宿の湯に子規の一句や秋深き
宿の下駄つっかけ秋の道後かな
松山のマドンナ弁当藷煮入り
糸瓜忌や俳人多き伊予の国
爽やかに地震の国説く尾池論
かけっこもいっしょ園児の運動会
秋天にはためく国旗徒競争

草の花

松岡　和子

花野ゆく「月の砂漠」をゆくやうに
審査員に流し目おくるかかし嬢
ゆさゆさと天秤棒や今年藁
こざつぱり生きてもんぺや草の花
ここからは女人結界曼珠沙華
衣被四季ある峡にくらしをり
満月に逃げも隠れもできぬ峡

PDF= 俳誌の salon

秋風

阪本　哲弘

新刊書懐中にあり秋高き
デパートの節電秋の蚊に刺され
敬老日達者ばかりが集ひたる
宿坊の馳走の一つ虫時雨
回想に耽る浅酌菊膾
月光の凛々として津波跡
秋風や妻の呟き聞き洩らす

小さき秋

伊藤　純子

草の花散歩の好きな女の子
熱の子のおんぶをせがむ秋の暮
野菊晴塔を巡れる小さき旅
新松子見上ぐれば塔迫り来る
大花野塔の上なる風の音
ひょんの実の軽さ悲しと思へる日
九月尽地球の自転早まりぬ

敬老日

北尾　章郎

茶事に呼ばれてマナー完璧生身魂
松手入根との勝負始まれり
婆娑羅踊の色気渦巻く古都大路
秋風にラフな着こなしニューモード
独り住みの料理教室秋なすび
登高の先達となり山ガール
酒豪いますすめ上手や敬老日

破風屋

吉田　希望

破風屋根柘榴の枝を押し返す
秋山に刺さる山門長谷の寺
大門の木組みあらはに秋気満つ
談山の摂社末社や初紅葉
人といふ大きな筒や秋愁ひ
どの鹿も尻毛は同じ量の白
破蓮や静まりかへる夜の水

PDF= 俳誌の salon

マリヤ像

落合　晃

洋館を描く学童秋高し
昼の虫聞くや山手のイタリヤ庭
木漏れ陽を集め輝くマリヤ像
爽やかや聖堂に声失へる
燭掲げ古りたるピアノ秋の声
曼珠沙華むかしを語る異人墓地
秋風や捨て水白き船の腹

初　鴨

竹内　悦子

猪垣を繕ふ人や陶の村
初鴨の気に入る栖処定まらず
龍田姫機嫌よき日の湖の凪
近江いま秋の田に満ち黄金色
綿菓子を不思議がる児や秋まつり
セレナーデに王女気分や後の月
水引草よき事続く予感かな

城下町

川崎　利子

御徒士町見越しの柿の似合ふ道
菊の香に心も澄める水琴窟
武家屋敷濠端筋の栗拾ふ
城下町を見晴らす荘に零余子垂れ
焼栗を剥きつつ歩く城下町
黒豆刈り慣れぬ鋏や丹波富士
門番は蓑虫独り陽を浴びて

秋高し

鈴木　照子

草津節流るる道路秋うらら
穴城の秋思苔むす野面積　（小諸城址）
秋高し鬼押し出しの溶岩聳え　（浅間山麓）
旅情碑の千曲川べり初紅葉
浅間白根の火山ルートやななかまど
秋の夜や星座占ひ明日は吉
大雨警報出でしちちろの闇深き

PDF= 俳誌の salon

斎宮

田下　宮子

古代米刈り進む田や斎宮址
華麗なる群行絵巻菊清く
色鳥の発ちて煌めく禊川
二上山(ふたがみ)をあふぐ古歌の碑花芒
冷まじや仏教禁制斎宮
野宮の黒木鳥居や秋深き
和田金に人あふれをり秋日和　（松阪牛の店）

適塾

坂上　香菜

ビル街に遺る適塾秋うらら
町医者の番付表や鵙の声
開きたる解体新書秋光裡
花芒風に靡くが似合ひけり
ひそやかに銀木犀のこぼるる夜
凸凹(でこぼこ)の壺へ挿したるをみなへし
円陣の野球少年ひつじ雲

樹匠

塩路　五郎

蟷螂の眼に狡獪を匿し得ず
渡り来る雁に見ゆるか子午線碑
秋風に紫煙燻らせ樹匠かな
間引菜に優劣はなし運不運
菊日和天気図二つ渦かかへ
配膳車松茸の香をこぼしゆく
豊胸の秋思観音仰ぎけり

体育祭

森下　康子

応援はジャニーズ張りや体育祭
秋天へ顔一斉に組体操
競技終へ十字切る児や運動会
指切りは小さき約束暮早し
手を抜けぬ将棋対戦木の実音
ついていい嘘もある筈けらつつき
脳トレの五百ピースや秋うらら

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

飛鳥晴　田中　芳夫

三山を遠景として逝く夏か
勧請縄を精霊蜻蛉くぐりけり
見はるかす棚田を区切る曼珠沙華
露草の瑠璃色こぼす棚田みち
曼珠沙華傾ぎて小さき入鹿塚

一位の実　山本　丈夫

みちのくの物産展や九月尽
掌に思ひ出ころろ一位の実
夜学子に明治を語る教授かな
定席は隅の止り木温め酒
屋根上のタップダンスや木の実雨

嵯峨野　松田とよ子

勅使門に嵯峨菊見事夕日照り
野菊晴れそぞろ歩きの嵯峨野道
吾亦紅ゆるる嵯峨野の夕映えに
菊薫る金剛石婚絆かな
藁塚に鬼の足見えかくれんぼ

紅　玉　笠井　清佑

豊の秋風評被害冷めやらず
そこ此処に連なる棚田稲架小さき
赤米の葛城古道豊の秋
紅玉のほろ酸っぱさや変声期
紅玉の大きさほどの暮しかな

萩の雨　笹井　康夫

秋深む古刹巡りの歴女たち
遠山に白き冠暮の秋
稔りよき稲田を祝ふ落暉かな
一雫またひとしずく萩の雨
つむじ風乱るる髪と萩の群

PDF= 俳誌の salon

大磐梯山

井口　淳子

空映す五色の沼の水澄める
磐梯の裾野の広し稲を刈る
秋晴の大磐梯山（おおばんだい）に息を止め
英世博士のここふるさとの天高し
身に入むや柱に刻む英世意志

秋の夜

粟倉　昌子

考妣のアルバム膝に秋の夜
官幣社に芸の奉納萩祭
奉納の短冊揺るる萩の風
街道のなごり地蔵や萩の叢
法要の終はりし気配萩の寺

お月さま

藤見佳楠子

ビル狭間色なき風の通ひみち
秋ぎざむ秒針の音ひとり刻
秋時雨交番何時も人気なく
掌にとりし桃の産毛や嬰の頬
お月さま聞いて下さい愚痴少し

鶉

宮崎左智子

神の田を追はれて来たり稲雀
八十路とて花のつもりぞ吾亦紅
こと切れし邯鄲の身のなほ美しく
鶉鳴く里穏和なり神の域
秋刀魚食ふ刹那あなたが嫌になり

秋　蝶

紀川　和子

ふるさとの阿波なつかしや女郎花
萩こぼれ木綿姿の妣偲ぶ
秋蝶のひとひら舞へる石舞台
祭太鼓今高らかに震災地
梯子して貰う薬包秋暑し

母在す

山崎　里美

十三夜うさぎが餅を搗いてをり
父の忌に猫を囲みて夜長なる
卒寿なほ稲刈り終へし母在はす
寝待月地球裏より子の帰る
大空に歪の花梨まだ青し

PDF= 俳誌の salon

十二月号月評

塩路　隆子

もう十二月号の月評を書く時期かと驚きである。年々年月が過ぎるのが早くなる気がするが、今年を振り返ると、毎月つぎつぎと良い句が生まれ楽しませていただくなど、皆様にはよく頑張っていただいたと心底思える一年であった。一泊吟行や本部句会にも積極的にご参加を戴き、いい句に出逢える楽しみを味わわせていただいたことも今年の大きな収穫であった。またよく皆様に支えていただいた。皆様へは感謝の念を禁じ得ないと言うのが今の気持ちである。ありがとう！

今年最後の月評を書かせていただく。

情念のごとく噴きあげ曼珠沙華　　田中　浅子

シーズンになると曼珠沙華の句がわんさと出てくる。当たり前のことを当たり前に表現しても印象には残らないと言うのが実情であろう。この句を見たとき鳥肌の立つ思いがした。一言い得た表現であると同時に死人花とまで言われた花に「情念」と言う語彙を選ばれしかも「噴きあげた」と捉えられた感性に脱帽。大切にして頂きたい一句である。

宿の下駄つっかけ秋の道後かな　　山口キミコ

作者は松山で開催された子規忌の全国大会に単独参加された御人である。その前後、雨台風に見舞われながらもひるまず参加されたその向学心たるや「瑷」一番であろう。「下駄履きて」でなく「つっかけて」の表現にも作者のリラックスされた情景が見える。坊ちゃん湯あたりを気楽に散策される作者の「カランコロン」の下駄の音まで聞こえてくる気楽なひとり旅の風景が窺われる。

こざっぱり生きてもんぺや草の花　　松岡　和子

よく月評に登場される甲賀忍者の里から句会や行事に参加されている作者である。生駒句会までは片道二時間半もかけて皆勤されている。古い日本の田舎の風景がいっぱいに残っている甲賀の四季を、くまなく詠い続けておられる姿に何時も感動している。最近あまり聞かなくなった「こざつぱり」の措辞がいい。華美でなく爽やかな清涼感のある生き方は松岡さん自身の生き方であろう。今でももんぺ姿がよく見られるとか、季語の「草の花」は最適の季語であろう。立派な句を作られた。今後も更に深く甲賀の峡の句を詠み続けて頂きたい。楽しみにしている。（以下略）

PDF= 俳誌の salon